

2021年12月19日 クリスマス(降誕日)礼拝メッセージ

「^{ことば}言から肉へ 思いから行いへ」

岡嶋^{ちひろ}千宙伝道師

聖書 ヨハネによる福音書 1章 1-14節

サンタクロース、プレゼント、ケーキ、イルミネーション、クリスマスソングにクリスマスツリー。いやいや、ここは教会なのだから、もっと信仰的なことを、ということで、だとしたら、クリスマスだから、う～ん・・・「栗と酢と升！」ある人が、クリスマスにまつわる連想ゲームをしていたときに、大声で答えていました。ちなみに、その人、わたしです。真面目にいきましょう。キリスト教の文脈で言うと、たとえば、生誕劇・ページェント。教会に足を運んだことのある人や、幼い頃にキリスト教の教育機関に通ったことのある人なら馴染み深いものだと思います。あるいは、イブの夜に行われる燭下礼拝、クリスマス礼拝後のお食事会など。わたしはというと、洗礼式のことを思い起こします。先月も少し触れましたが、わたしは、11年前のちょうど今日、12月19日のクリスマス礼拝で受洗しました。クリスマスということもあり、洗礼を受けて、めったに味わうことのできない大きな喜びに包まれたことを今でも思い出します。当時から11年が経ち、その思いは変わってきていますが、クリスマスは何か特別なこと、という感覚はなくなっていない。ところが、先日、別の教会で礼拝メッセージを担当したとき、ある教会員の方が礼拝後にこう仰っていました。「自分もクリスマス礼拝で洗礼を受けたが、喜びを感じたわけでも、特別なことと思っただけでもなかった。ただ必要なこととして、淡々と洗礼があったという感覚。だからクリスマスにしても、普段とは違うことが行われる以外に、特別感はない。」わたしとは異なるクリスマスのイメージがあることを知った瞬間です。

普段思い描くものとは別のイメージをもったクリスマス。これまでの「日常」や「普通」が成立しにくかったこの年に、別の角度から、クリスマスの意味をとらえ直してみるとするのは、時宜にかなったことだと思うのです。そのためのうってつけの素材が、本日の御言葉。先程共に聞いたヨハネ福音書 1章 1-14節。クリスマスをイメージして、もう一度見てみてください。驚きませんか。「どこがクリスマスなのだ！」ページェントに親しんだ人なら、クリスマスと言われて、劇中の登場人物を思い浮

かべるかもしれませんが。イエスの母マリア、父ヨセフ、羊飼いや天使たち、東方から訪れる学者、宿屋の主人などなど。その誰も登場していません。なにより、劇の主人公であるイエスの名前すら記されていないのです。ちなみに、イエスという名前が出てくるのは、14 節から 4 節先の 18 節になってようやくです。一人一人の人物像、一つ一つの場面設定が生き生きと描かれるルカ福音書やマタイ福音書の描写とは全く異なります。

それでもやっぱり、クリスマスの記事なのです。なぜって、クリスマスは「神の子イエスがこの世に誕生したことを記念する日」で、その意味のクリスマスは確かに描かれているからです。14 節「言^{ことば}は肉となってわたしたちの間に宿った」。ちょっと説明が必要ですが、教会では、「言^{ことば}」とはイエスのことを表し、「肉」とは身体をもった人間を意味するとされています。そして「宿る」というのは、生活の場を設けるということ。これを踏まえて 1 節を見ると、終わりの部分に「言^{ことば}は神であった」と書かれています。ということは、神である言^{ことば}、つまりイエスが、どういう理由でか、この世に、身体をもった人間として生まれて生きたということになります。だから、イエスの誕生を描いている、クリスマスなのです。でも、やっぱりどこかしっくりこない。調子が狂う。その原因を探ろうとして、それ以外に何が書かれているかを見てみます。ますます訳がわからない。ぱっと見て、どうやら、この世界を含めた全てのものが成立するより前、万物の始めに、神がいて、その神とともに、言^{ことば}であるイエスがいたということです。そして、そのイエスを通して、この世のすべてが創られ、その創られたものとイエスとは今も関係をもちあっているという。う～ん。分かるような、分からないような。象徴的な言葉を用いた独特な言い回しで淡々と語られるこの箇所。ページエントのイメージからすれば、やはり異質です。しっくりこない。違和感が残る。これがクリスマスといわれてもちょっとね・・・と首を傾げたくになります。

違和感の理由ははっきりしています。描写が具体的ではないからです。なぜ福音書を記した著者は、これほどまでに抽象的な描写にこだわったのでしょうか。不思議です。その問いに対して、正解があるわけではありませんが、わたしなりに推測して行き着いたのは、イエスの誕生の意味を固定化したくなかったのでは、という答えです。イエスの誕生を描く記事に触れる一人一人に、その場面の有り様を、ある

いは誕生のもたらす意味を、自由に豊かに想像してもらうことを期待し、促している、と言えはよいでしょうか。ルカやマタイが描く誕生物語では、描写が具体的で明確であるため、内容がすうっと入ってきます。登場人物の一人一人、なんなら、ページエントの影響もあるのですが、動物の鳴き声まで聞こえてきそう。ですが、内容が入ってきやすいということは、危うさもはらんでいます。受け取った側に、一つのイメージが定着してしまうと、たとえそれが間違っただけであつたとしても、固定化されてしまうからです。受け取った一人一人が、自ら思いを馳せて、イエス誕生の意味を「自分ごと」として振り返り思い起こすということができにくくなるのです。これに対して、抽象的な表現は、すうっとは入ってきません。つかかりがありません。つまずきがあります。つまずいた側としては、内容を吟味し、意味を導きだそうとします。様々に思いを馳せて、考えます。自分で、あるいは、隣にいる人たちと一緒に。あーだこーだいいながら、何かしらの答えを見いだそうとします。いったん、「これだ!」と思っても、何かのきっかけで「違うのでは?」となると、もう一度考え直すことだってありえます。個々の「わたし」が感じ、考え、思うことを様々に、自由に、引き出していく効果。思いを想起させること。創造性を引き出すこと。

個々人の自由な創造性を喚起するという観点から、今日の御言葉を見てみると、確かに表現は抽象的ですが、その内容に関しては、リアリティに溢れ、ゆえに具体的と思える箇所があることに気づかされます。先程も着目した 14 節。まずは「言ことばは肉となる」という言い回し。「言ことば」とはイエスのことで、それは神です。ところで、神様って、人間には見えません。触ることができません。いったいどこにいるのか、と思いたくなるし、そう思うのは現代に生きる人だけではないことが、聖書の至るところで記されています。この世界においては、物質的ではないという意味で、具体性にかける存在。その神が「肉になる」と言われています。「人」ではなくて「肉」です。人を表す言葉は、4 節、6 節、13 節と、この箇所の他の節で用いられているのに、あえて「肉になる」と言われています。その意図するところ。それは、神が身体を持ったということ、そして、その身体と同時に、弱さを含めた人としての特徴を持ったということです。神は、完全にわたしたちと同じ人間になったのです。身体をもった、物質性をもった、弱さを含めた人間性を備えた存在に。そして、肉となった神

は、「わたしたちの間に宿った」。「宿る」と訳されているギリシア語は、「テントを張る」という意味で、居住場所を構えるというニュアンスをもつ言葉です。ある解説によると、当時の使われ方を踏まえて現代風に訳し直すと、「隣に引っ越してくる」というのが近い表現になるそうです (Karoline Lewis, 'Commentary on John 1:1-14' <https://www.workingpreacher.org/commentaries/revised-common-lectionary/christmas-day-nativity-of-our-lord-iii/commentary-on-john-11-14-4> <last visited 16 Dec. 2021>)。

姿・形も見えず、触れることもできない神が、身体をもった人として、隣に引っ越してくる。わたしには、とてもとても、具体的なイメージに思えます。具体的であると同時に、創造力が駆り立てられます。「いったい、その人、人となった神様イエスは、どんな格好をしているのだろう。何を食べているのだろう。どんな生き方をするのだろうか。ご近所同士、仲良くできるだろうか、それとも、隣人トラブルが発生してしまうだろうか。」もちろん、現代の感覚からすると、イエスは物理的・物質的に、遠い存在であることは間違いありません。イエスが神で、神でありながらも人として身体をもってこの世に生きたとしても、それは今から 2000 年以上も前に起こったとされる過去の出来事です。たとえそれが史実だとしても、今となっては、面白い歴史の逸話であるかもしれないけれど、影響力の薄い、自分とは直接に関係をもつものではない、そう言いたくもなりません。いやいや、それが関係ありあり、とヨハネ福音書は伝えます。今日の箇所の前半を見ると、神であり言であるイエスが「光」として語られています。5 節では、その「光」が今も「輝いている」と言われ、さらに 9 節では「世に来てすべての人を照らす」と言われています。1 節から 14 節まで、ほとんど過去形で語られている中で、この二ヶ所は、現在形で語られています。光であるイエスが、今もなお、この場所で、この時に、輝き、わたしたちを照らし続けている。確かに、イエスとの直接の出会い、直接の触れあいはありません。けれども、イエスという人物の存在を通してまたは、介して、別の形での出会いが生まれしていく。あるいはこれまでの出会いが新たにされていく。それが、「光であるイエスが輝いている、この世を、わたしたちを照らしている」ということの意味なのだと思います。身体をもって生きている人間同士が出会い、共に生きていくことの連鎖が、イエスが生きた時から、脈々と続けられている。それは、キリスト者を量産し、キ

リスト者連合である教会組織が世界の覇権を握るためではありません。イエスの誕生に触れることで、個々の「わたし」が、自分に与えられた出会いの意味を問い直し、イエスを中心とした新しい関係の中で、生き始めるのです。イエスがもたらした出会いの意味を、各々が思い描き、その思いの中で、共に生きることのできる世界を具現化していく。思いを行いにする。変わっていく、変えていく。共に生きる世界を描き、築き上げていく。

それにしても、今、イエスが隣に引っ越してきたら、はっきりいって、めんどくさい。隣人イエスは、ちゃんとわたしの話を聞いてくれるだろうか。わたしはというと、イエスの話を聞く自信はありません。見知らぬ人たちをつれてきて、夜中でもどんちゃん騒ぎをしそうで、そんなの迷惑きわまりない。病気を治せるという噂がたって、それなら!と思って訪ねたら家になくてどこかをほっつき歩いている、しかも何日も、何週間も、何ヵ月も帰ってこない。なんてこともあるのでしょうか。もっと色々、とにかくめんどくさい。ひょっとしたら、イエスは、わたしがそんな風に、めんどくさく思うだろうことを想定していたのかもしれませんが。だから、今から 2000 年前に、一度だけこの世に訪れて、物理的には、その当時のその地域にいた人たちだけに出会い、あとの時代、別の場所の人たちには、刺々しさを削ぎ落とした形での出会いを与えてくれたのかもしれませんが。いや、逆に考えてみたらどうでしょう。イエスの立場だったら。わたしが「めんどくさい」と思ったのと同じように、それ以上に、イエスはわたしのことを「こいつ、めんどくさい。自分のこと、わかってくれないし、言っていることもやっていることも、支離滅裂だし」と思ったのではないのでしょうか。それを考えると、神であるイエスが、様々な制限と弱さをもって、人々の中に生き、めんどくささを含めた人間の命を生き抜いたということは驚くべきことです。肉を持つ存在。わたしとあなたが共に生きていく。お互いに、弱さを抱え、似ているところもあれば、異なるところもたくさん持ち合わせる者同士が共に生きていく。その喜びだけではなく、煩わしさをも、人として体現した神イエスが、生身の身体でこの世に生きたという事実。そのイエスを真ん中に据えて、すでに与えられている出会いをもう一度とらえ直す。新しい出会いを迎え入れる。

これまでの日常が成り立たなくなり、社会の様々なところで歪みが生まれ、分断が生じている今。持てる者と持たざる者、生き長らえることのできる者と命を削られる者、高らかに声を発することの出来る者と沈黙せざるをえない者。人と人とを分け隔てる溝が大きく大きくなっている現代。「わたし」と「あなた」との出会いの意味を捉え直し、一つ一つの出会いを、神であるイエスによってもたらされたものとして新たなものにしていくこと、そして、共に生きる世界を描き、そのために、小さくても具体的な一歩を踏み出し、行動することの意義はとて大きいように思えます。わたし自身、それができているとは言えません。また、自分だけで、それができるとは決して思えません。けれど、今日誕生したイエスが中心にいてくれるのなら。そのイエスによって出会わされたみなさんと一緒なら。悩みながらも、つまずきながらも、前に進むことはできる。見いだすことができる。異なる者同士が、煩わしさを覚えて、めんどくさく思ったとしても、共に、平和のうちに、愛のうちに生きる世界がもたらされるはず。その思いを新たにされる日。イエスの誕生に触れ直し、喜びを共に味わうクリスマス。今日から始まる一日一日。与えられた命、与えられた出会いの中で、互いの手を取り、イエスに導かれて、共に歩み、共に生きていきましょう。

イエスさまの誕生、クリスマス、おめでとうございます。